

IFA the COMMUNICATOR!

月号

心と心、世界と日本を結ぶ*コミュニケーション

IFA

私と国際交流・インタビュー

観光とともに歩んできた

共栄大学 国際経営学部 観光ビジネスコース 客員教授

旅行会社に 33 年間勤めた後、大学教員に転身しました。旅行会社では、オーストラリア・シドニー、中国・北京での駐在の他、国内勤務でも 1 年に 5、6 回は、添乗員として、またはツアーアイ企画などのため、世界各地を回っていました。

大学教員の今は、観光関連の講義を担当する一方、ゼミ生との国内外への研修旅行、官公庁や旅行関係団体での外国人観光客誘致についての講演など、多忙な毎日を送っています。70 歳になってしまっても、観光に関わっていられるのは幸せなことです。

●天安門事件に遭遇

海外生活で一番緊張した地は、1989 年から中国・北京事務所に所長として単身赴任した中国です。4 年間の駐在でしたが、その 1 年目に天安門事件に遭遇。当時、天安門付近は、朝晩には何十台もの戦車や装甲車が走り抜けていましたが、日中は子どもたちがいつもおりに遊んでいる姿も見られました。当時日本で報じられていたような緊迫した状況が終始続いているわけではありませんでした。そんな中、私は、比較的安全と言われていた日本国大使館近くの日系ホテルに部屋をかり、2 台の電話を使い、うち 1 台を東京の本社とかけっぱなしに、もう 1 台を中国国内の関係先との連絡用に使い、国内に残されたツアー客の帰国手配などに奔走しました。事件後 1 週間程度で目途が立ち、私も救援機の最終便で何とか一時帰国しました。

中国駐在中、一番苦労したことは、日本からの要人往来時の会談の約束の取り付けです。中国では、東京から社長が来るので会って欲しいと言っても、事前に中国側のトップが会談を約束することは稀なことです。駐在員は東京に中国の異なる習慣を説明しつつ、中国側には、最大の熱意を示し続けることでトップ会談の実現を図ります。最終的には、先方のトップが直々に玄関で出迎えた上でトップ会談が行われ、夜も盛大な歓迎会というのがほとんどでした。途中ひやひやさせられながら

も、最後には中国人の演出力、もてなしの力に驚かされました。

海外に一番長く滞在したのは、1981 年から 86 年まで 5 年間で、豪州・シドニーでした。妻、子ども 3 人とともに駐在しました。支店を開設したばかりで日本からの来訪者も多く、土日も仕事という忙しい日々でした。豪州では夕方の夫の仕事とされる芝刈りもほとんどできず、隣の家人が手伝ってくれる有り様でした。それでも家族 5 人で赴任したこと、交流の輪が広がりました。家を留守にすることが多い私を常に支えてくれた妻、はじめての海外の生活を楽しんでくれた子どもたちには本当に感謝しています。



1945 年、千葉県生まれ。67 年、早稲田大学商学部卒。日本交通公社（現・JTB）入社。シドニー支店次長、北京事務所長、JTB アジア・取締役日本支社長など歴任。2000 年に退社。同年より 08 年まで大阪明浄大学（現・大阪観光大学）助教授を経て教授。08 年から同大名誉教授。08 年から 15 年まで桜美林大学教授。09 年から国連・世界観光機関観光専門家委員会委員。15 年から現職。

●観光業との出会い

千葉県の海運業を営む家庭に生まれ、将来は家業を継ぐものと考えていました。ところが、私が小学生になる直前、事業を拡大しようと購入したばかりの大型船が暴風雨により沈没。海運業が破産してしまいました。突然の環境変化で戸惑った面もありましたが、中学、高校では英語が好きでしたので、海外とつながりのある貿易関係の仕事を商社でしたいと思いました。大学は商学部に進学しました。入学後にスペイン語も勉強し始めました。

観光業に就こうと思ったきっかけは、大学 3 年生のとき、北陸を旅行していました。たまたま列車の向かいに座った女性が日本交通公社の方でした。「これから時代、海外渡航が自由になります」という言葉をつくりますよ」と言うのです。旅行会社の私のイメージが変わりました。「スペイン語を生かして、スペイン・マドリッドの支店長になろう」と思いました。そこからはスペイン語に力を入れ、週 4、5 日、語学学校で勉強し、以後、豪州駐在までは会話は英語よりもスペイン語の方が得意でした。

●海外で働くことの勧め

外国人と初めての会話も大学時代。ウルグアイなどから来た留学生たちと英語、スペイン語で話しました。本格的な外国人との交流は、67 年に日本交通公社に就職した後の京都支店時代です。スペイン語ガイドを希望したメキシコ人家族に京都と奈良を案内しました。いざとなれば、自分で通訳ガイドもできるという自信がつきました。

93 年に北京から帰国後の 7 年間は、JTB の中でアジア・オセアニアを統括する役職に就きました。50 代半ばを過ぎると多くの人は、関連子会社への出向の声がかかりはじめます。私は、定年後も観光に携わり続けたいと思い、一念発起して、55 歳のときに大学教員に転身しました。

大学でも、これまでの旅行会社で培った観光に関する知識を若い学生に講義したり、議論したりと、楽しい時間を過ごしています。学生も色々ですが、概して、1 年次から積極的に自分の興味を広げ、2 年次からの研修旅行などのゼミ活動でその関心を深められた学生は、就職も希望を叶えています。学生には、一度は海外で働くことを勧めています。外国人からお金をもらうことの大変さを実感することは、外国人旅行者を日本に呼ぶ際に大いに役立つからです。年間 2000 万人の外国人観光客の来日が叫ばれる昨今、外国人旅行者の日本に対する真のニーズの把握が大切だと感じています。